

## カインの末裔

創世記 4:1～16

ヘブライ 11:37～38

今日のカインとアベルの話は、クリスチャンならば、説明する必要もないくらいよくご存じであるものです。カインの話は多くの文学や美術など、芸術作品にも取り上げられています。

兄カインは土を耕す者で、土の実りをもって神様に献げました。そして羊を飼っていたアベルは羊の中から肥えた初子を持ってきました。それぞれ自分が働いて得たものを神様の前に持ってきたのです。しかし、神様はアベルとアベルの献げ物には目を留められました、カインとカインの献げものには目を留められなかったです。なぜでしょうか。創世記の中にはその理由が書かれていません。それに対して、考えられることは「カインとカインの献げ物」と「アベルとアベルの献げ物」と書かれているところから、献げ物と共に献げる者を神様がどのように見ておられるのかが問われています。

使徒パウロは言っています。「兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。（ローマ 12・1）」自分を先ず、いけにえとして神様にささげる、それが礼拝なのです。ヘブライ記者は 11 章 4 節で、アベルは信仰によってカインより優れたいけにえを献げたと言っています。

神様への献げものが受け入れなかった時、カインは激しく怒って顔を伏せました。神様への怒り、それは自分を絶対化した者の姿です。神様さえ、自分の思い通りにならなければならないのです。自己中心的な考え、当然自分は受け入れられるべきであるという自己絶対化は、神様にも怒り、自分の方法と手段によってその問題に向かいます。神様の前に謙り、なぜそのようになったのか、神様に問うてないのです。自分の思い通りに行かなかったことへの怒りは、兄弟への暴力として現れます。

嫉妬によってカインは弟を殺します。わたしの人生の邪魔者は消えて行ってほしかったのです。神様に礼拝を守り、献げものをしましたが、神様とは関係がない、自分の欲望に生きる人間でした。聖なる光の中でも暗闇を抱き、讃美歌を歌いながら、兄弟を殺す策を立てていたのです。

しかし、神様は生きておられ、すべてを知っておられる方です。アベルの悔しい叫び声を聞く方です。「お前の弟アベルはどこにいるのか。」と問う神様に「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」神様の前さえ、真実を語ることをしなかったカインは、すべてを御存じである神様の前で我に返り、不安に襲われます。そして、言います。「わたしの罪は重すぎて負いきれません。今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となってしまうえば、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」

自分がした行為に伴う必然的な結果に苦しんでいます。特に、自分が弟を殺したように、自分もその対価として同じ死に会うのにちがいない、という恐怖におののいています。

わたしたち人間は神様と共にいながら、その聖なる土地の中でも罪を犯し、祝福を不幸に変えます。神様が良しとされた祝福されたこの世界を兄弟の血と叫び声の地にしてしまったのです。まさに、今の世界を生きるわたしたち人間の姿を物語っています。しかし、神様はそのようなカインにも憐れみと恵みを与え、カインに出会う人が彼を打つことがないようにしるしをつけてくださいました。まさに命のしるしです。

16節を見ると、「主の前を去り」と書かれています。神様の保護と恩寵を経験したのにもかかわらず、自ら神様から離れ、17節を見ると、その後、カインは結婚をし、子供を産みます。そして、町を立てました。次々と生まれた子孫たちの中から、家畜を飼い、天幕に住む者が出ました。富を求め、家を建てることになったのです。また、豎琴や笛を奏でるものが出ました。音楽、芸術の誕生です。青銅や鉄で様々な道具を作る者が出ました。文明の発達が見えます。文化と文明の町が作られました。つまり、人間の欲望が花を咲かせる町になったのです。人間の自己主張と自己実現の町になっています。

その子孫であるレメクは妻たちに言います。「アダとツイラよ、わが声を聞け。レメクの妻たちよ、わが言葉に耳を傾けよ。わたしは傷の報いに男を殺し、打ち傷の報いに若者を殺す。カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍。」歌のような調子ですが、その内容は聞く者をぞっとさせるほどの残虐な話です。刀を振るいながら自分の力を誇示しているかのように見えます。兄弟を殺したカインの血が流れています。妻を支配し、自分を守り、自分が絶対化され、暴力に満ちた歌です。カインの末裔はこのような者になったのです。相手を殺すためには手段を選ばない、怖ろしい化学兵器でも核兵器でも構わないのです。復讐は七倍から七十七倍になりました。兄弟を殺したカインの暴力の世界は今の世界でもあるのです。今も聞こえてくる、世界のあちこちの銃声、迫害、差別、憎しみ、戦争と殺戮の血まみれの歴史の中に私たちは生きています。

ヘブライ記者は言っています。

「彼らは石で打ち殺され、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊の皮や山羊の皮を着て放浪し、暮らしに事欠き、苦しめられ、虐待され、荒れ野、山、岩穴、地の割れ目をさまよい歩きました。世は彼らにふさわしくなかったのです。」(ヘブライ 11:37, 38) ここでの彼らは神様に従う人たちでした。そのような人たちは考えられない残忍な暴力を受けました。自分を絶対化し、偶像崇拜をする者たちは、主イエスを十字架につけ、そのように残忍を極める暴力で、主に従う者たちも苦しめたのです。そして、神の国と義を求める者たちに向けられた迫害は今も続いています。

しかし、主イエスはカインの子孫によって死への道を辿るように定められたわたしたちの世界を回復しようとする世に来られました。平和の道を与えてくださいました。そして、わたしたちはカインの末裔ではなく、イエス様の末裔として選ばれているのです。

自己中心と自己絶対化、暴力を構わないカインの末裔の生きるこの世界で、私たちは主のゆるしと平和を伝えています。これはいばらの道です。主に従う私たちには、この世は安住の地ではありませんが主が共におられます。どのような試練があっても私たちは主が与えてくださる平和の道を雄々しく歩いていきたいものです。主は生きておられ、ご自身が選らん者の叫び声を聞いてくださいます。そして、必ず報いてくださる方であるからです。

